

た。馬鈴薯畑も畦の長さが1,500m, 長いのは2,500mもあり, その植付と, 収穫がすべて人力によるこれまた人海戦術によるとのことであった。品種は克新系のもので, 使用種薯は自家産で, 採種体系により供与されたものではなかったので, この圃場では病害虫の発生が多く見られた。肥料は殆んど無施用に近く, 薬剤散布は一度も行なわれていないとのことであった。従って収量は反収1,000kgにも満たないだろうとの説明があった。研究所編の技術書には, 施肥や農薬の点を詳細に記述されていて, 反収2,500kgを目標としているが, この技術がどのように一般農民に普及されているのか疑問を持ったが, この点についての質問する機会がなかったのが残念であった。

黎明村での馬鈴薯の反収は決して豊かではなかったが, それでも村長は流通, 消費が不十分なので減反しなければならないと語った。省内で国営1ヶ所, 省営2ヶ所の合理化澱粉工場と, その他多くの小規模な澱粉工場があるが, 厳冬期間の大きな貯蔵施設がなければ, 各生産農家の貯蔵に依存することになるので規模の点からも, その消費能力は限られて生産過剰になるらしい。黒竜江省内の作物構成が, 大豆30.2%, 小麦26.8%玉蜀黍19.2%, 粟10.2%, 高粱4.1%, 水稻3.4%, 馬鈴薯3.2%であり, また馬鈴薯が他の雑穀類に較べ, 経済的にも軽視されている傾向だという。

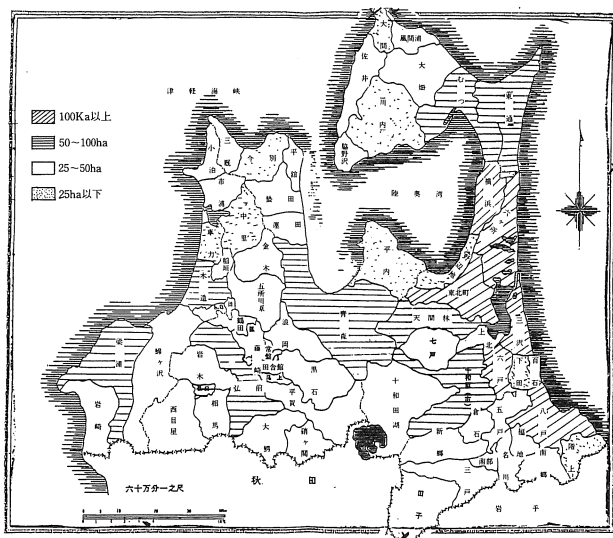
(略歴) 塩田弘行 大正3年8月15日生。昭和15年北大卒。昭和22年農林省北海道中央馬鈴薯原原種農場に出向, 胆振農場長, 中央農場長を経て昭和48年退官。昭和48年より昭和56年まで士幌町農業協同組合常勤技術顧問として勤務, 以後非常勤技術顧問。



青森県におけるばれいしょ栽培の現状と今後の展望

青森県農林部農業指導課 専門技術員 佐藤 忠 弘

青森県におけるばれいしょ作付分布図



1. はじめに

ばれいしょは, 本県の冷涼な気象条件に適し, かつ, 栽培期間が3~4か月と短かく, 後作の導入や栽培の省力化が可能なことなどから, 畑作経営の主要な作目の1つとして, 県内一円で栽培が行われている。この中で, 津軽地域では, 農家の自家用が主体となっているものの, 主産地の県南畑作地帯では, 「ばれいしょ+野菜」体系または, 「ばれいしょ+小麦(なたね)+野菜」体系の基幹作物として定着し, 生産量の大半を指定消費市場に出荷している。

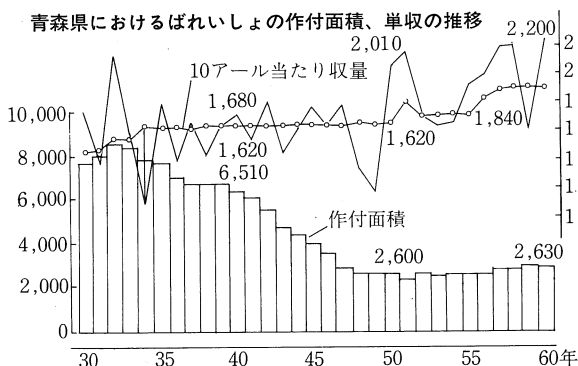
また、国の「上北馬鈴薯原原種農場」が県南地域の上北郡天間林村に設置され、主として東北地方への優良原原種の配布を行っており、本県ばれいしょの生産振興に大きな役割を果たしている。

2. ばれいしょ栽培の現況

(1) 作付面積及び単収

60年度の作付面積は、2630haと全国第5位となっている。これまでの作付面積の推移は、32年度の8,660haをピークに50年代にかけて開田や野菜等への転換によって減少を続けたが50年度以降は2,600ha台を維持しほぼ横ばいに推移している。特に、55年度から58年度の異常気象年の4ケ年間は、水稻の作柄が平年作を下回ったのに対し、冷涼な気象条件に適応する特性を実証し、常に平年作以上の作柄を確保した。

また、60年産10アール当たり収量は、2,200kgと過去最高の収量を記録し、全国第6位となった。しかし、これまでは、春期の消雪遅延や低温、過湿によるいもの腐敗、生育不良により年次格差が大きく、また単収も、北海道(3,560kg)の60%にとどまっており、今後、輪作体系の確立や地力の維持増強等により作柄の安定を図っていくことが必要である。



(2) 品種

県の奨励品種は、「メークイン」、「男爵薯」、「ワセシロ」で、この3品種で作付全体の92.5%を占めている。

これまでの品種の推移は、ここ10年間で大きな変化を示し、50年度には、「男爵薯」が全体の72.8%を占めていたが、60年度には、市場性の高い「メークイン」が64.8%を占めている。また、加工用として増加が期待された「ワセシロ」、「トヨシロ」は55年度以降の生食用との価格差などから伸び悩んでいる。

青森県におけるばれいしょの品種構成の推移 単位%

年度 区分	50	55	60
メークイン	13.7 %	41.3 %	64.8 %
男 爵 薯	70.8	47.5	22.2
ワ セ シ ロ	—	6.3	5.5
農 林 1 号	12.9	1.3	0.6
ト ヨ シ ロ	—	—	5.1
そ の 他	3.0	3.6	1.8
計	100	100	100

注) 農業改良普及所調査

(3) 地域別作付状況

ア、津軽西海岸産地

本地域は、日本海沿岸沿いに南北に長く伸びる岩木山麓の山間台地と津軽半島西部の屏風山地域に位置し、津軽地域で唯一の産地となっている。気象的には津軽中央部よりも積雪が少なく、消雪期が早いいため早掘栽培の適地となっている。品種は「男爵薯」「ワセシロ」の早生種が主体に作付けされている。昭和52年に産地指定を受け、60年で作付面積90ha、収穫量1,770tの産地を形成している。

イ、県南産地

本地域は、大太平洋岸から内陸部に拓けた地域で気象的には、「ヤマセ」(夏

期の冷涼な濃霧を伴う偏東風による低温や、日照不足などの影響を受け易く、作柄の安定性を欠くことがあるが、ばれいしょをはじめ、ながいも、にんにく、秋冬だいこん秋にんじんなどと数多くの作目が導入され、本県の主要な畑作地帯を形成している。土壌条件は表層腐植質黒ボク土壌である。

ばれいしょの植付けは、消雪期の早い太平洋沿岸地帯では3月下旬頃から始まるが、内陸部の東部上北地帯では、積雪がやや多いほか、4月中旬頃まで低温、湿潤な天候が続くことが多いため、マルチ栽培主体の作型が多い。

指定産地は、5産地8市町村に及んでおり、60年の作付面積は1,380ha 収穫量33,818tの産地を形成している。

(4) 作型

作型は、気象条件や営農条件から、普通栽培が主体となっている。

しかし、近年、東北町、六ヶ所村の主産地において、「メイクイン」の早期出荷を目的

青森県におけるばれいしょの指定産地の状況

(単位：ha、t)

指定産地名	指定年度	関 係 市 町 村	60年	
			作付面積	生産量
東 部 上 北	49	三沢市、六戸町	509	12,490
北 部 上 北	49	横浜町、野辺地町	209	5,389
中 部 上 北	50	東北町、天間林村	456	11,110
下 田	51	下田町	42	979
津軽西海岸	52	鯉ヶ沢町、深浦町、岩崎村	90	1,770
六 ヶ 所	54	六ヶ所村	164	3,850
小計	6	11	1,470	35,588
県計	6	67	2,630	57,900

資料：農作物統計表

青森県におけるばれいしょの作型

地 帯	作 型	催芽開始	植 付 期	収 穫 期
平坦地	早掘栽培(マルチ)	3/下～4/上	4/中～4/下	7/中～7/下
	普通栽培	3/下～4/上	4/中～4/下	8/中～9/下

青森県産ばれいしょ用途別数量(60年産)

(単位：トン、%)

用途	項 目	数 量	割 合
販 売 用	農 家 保 有 計	11,698	20.2
	市 場 食 品 用	35,780	61.8
	加 工 食 品 用	5,802	10.0
	種 子 用	2,180	3.8
	販 売 用 計	43,762	75.6
減 耗		2,440	4.2
合 計		57,900	100.0

資料：県畑作園芸課(推定)

青森県産ばれいしょの集出荷状況

(単位：トン、%)

年産	生産量①	出荷量②	出荷率②/①	系統取扱量③	共販率③/②
56	48,700	37,004	76.0	13,206	35.6
57	56,800	43,703	76.9	18,227	41.7
58	56,800	43,207	76.1	16,637	38.5
59	42,800	31,110	72.7	15,234	49.0
60	57,900	43,762	75.6	11,091	25.3
5か年平均	52,600	39,757	75.6	14,879	37.4

資料：農作物統計表、園芸作物流通統計年報、経済連資料

としたマルチ栽培が普及してきている。

マルチ栽培、普通栽培とも、消雪期等自然条件から催芽期、植付期は同一時期となるが、収穫期はマルチ栽培が7月中～下旬と、

普通栽培よりも約1ヶ月早まる。これを主産道県の収穫期と対比してみると北海道(9月上～下旬)よりも早いものの、長崎(5月上旬)、茨城、千葉(6月中旬)、福島(7月上旬)よりは遅れ、大産地北海道産ものが出回る前に良品ものを出荷できる作型を確立することが課題となっている。

(5) 用途

用途別消費状況は、生産量57,900tのうち、生食用が35,780tと61.8%を占め、ポテトチップス等加工用が5,802tの10%となっている。

(6) 集出荷状況

昭和61年度ばれいしょ原採種ほ設置状況(単位:a)

品種	区分	原種ほ	採種ほ	計
男 爵 薯		1,080	450	1,530
マークイン		1,220	3,240	4,460
ワセシロ		470	730	1,200
トヨシロ		670	3,570	4,240
計		3,440	7,990	11,430

資料：県農業指導課

集出荷状況は、生産量の75%が生食用として東京、名古屋地域を中心に出荷されているが、このうち系統出荷は約11,000tの25.3%と57年度以降取扱量が減少傾向にあり、系統の集荷体制を整備し、共販率を高めていくことが必要である。

3. 種ばれいしょの生産状況

(1) 原・採種ほの設置状況

原・採種ほは、61年度で13市町村に原種ほ34.4ha、採種ほ79.9ha合計114.3haが設置されている。これに必要な原原種は、総て本県天間林村に設置されている農林水産省上北馬鈴薯原原種農場から供給を受けている。

品種別には、「男爵薯」15.3ha、「マークイン」44.6ha、「ワセシロ」12.0ha、「トヨシロ」42.4ha、となっており、「男爵薯」及び「マークイン」は全量県内向け、また「ワセシロ」、「トヨシロ」は約半数が県外向けの種いもととして供給されており、供給量のうち本県で消費されるものは67%である。

(2) 種ばれいしょの生産・流通体制の整備

ばれいしょの収量及び品質を向上させるためには、無病で優良な種いもを使用し、毎年これを更新していくことが大切である。

しかし、本県の種いも更新率は50%程度と低く、この種いもも多くを北海道産に依存していることや、原種ほに対する採種ほの基準に達していないなど、主産県でありながら種いもの生産流通体制が大きく立遅れている現

状にある。

これは、過去において県産種いもが、北海道産に比べウイルス病等の出現が多く、収量差もあったことや、生産された種いもの出荷業務が一部農協を除いて採種ほ生産農家に委ねられていることなどにより、県産種いもの評価が確立していないこと等に起因している。

このため、本年度は北海道産と県産種いもによる収量品質比較試験を実施し、この結果を基に県産種いもの評価向上に努めるとともに、前年に引き続き県及び県経済連が中心となって生産出荷体制の整備を促進し、県産種いもの需要拡大と県産種いもによる種子更新率の向上を図ることとしている。

4. ばれいしょの生産振興方向

本県は、高速交通体系の進展に伴い、主要中央市場への輸送時間が短縮されることや、大規模農地開発により作付可能地が増加することなど、今後ばれいしょの振興を図っていく上で比較的恵まれた条件にある。

このため、県では昭和70年度におけるばれいしょを含む野菜生産額の倍増を骨格とした「第3次青森県野菜振興計画」を策定し、生産流通全般にわたる施策を積極的に講じていくこととしており、この一環としてばれいし

青森県におけるばれいしょ生産出荷振興計画

生産出荷目標値				
項 目		年 次		
		58年	65年	70年
出 荷 量	全 国(t)	2,683,000	2,768,000	2,828,000
	本 県(t)	43,200	49,720	60,000
	県 シ ャ ア(%)	1.5	1.8	2
作 付 面 積(ha)		2,680	2,870	3,000
県平均単収(kg/10a)		2,120	2,250	2,500
収 穫 量(t)		56,800	64,580	75,000

(注) 第3次青森県野菜振興計画

よを本県畑作地帯における基幹作物として、その生産の拡大を図り、定着化に努めることとしている。

(1) 生産計画

国全体の需要動向は、主食・副食型から野菜、さらにはスナック食品等加工食品型に移行し、国民1人年間当たり供給量も17.7kg(59年)と消費の減少傾向に歯止めがかかりほぼ横ばいに推移している現状にある。このため、ばれいしょの生産振興に当たっては、大規模農地開発地域への計画的な導入等により、既存産地の拡大のみならず、指定産地のない北、下北、東青地域に新たな産地を育成するなど、70年には作付面積3,000ha、収穫量75,000tを目標に産地育成に努めることとしている。

また、土づくりや、県産種いもによる種子更新の促進等による単収の向上と、機械化一貫作業体系の確立により、コストの低減を図るとともに一戸当たり作付面積の拡大、後作に高収益な作物を導入しうる輪作体系の確立に努め、農家経営の安定を図っていくこととしている。



川越イモの歴史

＝現地情報＝

井 上 浩

1. はじめに

わが国で「サツマイモ」といえば、「薩摩の国」や「鹿児島」ではなく、武州の「川越」だ。数あるサツマイモ産地の中で、なぜそうなのか不思議に思う人も多かろう。そこで川越イモの230年余の歴史をふりかえてみたい。

(2) 品種

品種面では、主力品種である「マークイン」「男爵薯」が育成されてからかなりの年月が経っており、生産者、消費者から新しい品種の育成が求められている。このため、国の新品種開発育成と相まって、本県の気象条件に適応した収量性、耐病性、耐寒性及び、食味の優れた品種の現地適応試験等を通じて銘柄を確立し得る品種の選抜、普及に努める。

(3) 流通対策

本県は地理的、気象的な条件から普通栽培では大産地北海道と競合し、販売面では不利な状況にある。このため、マルチ栽培による早出し栽培をこれまで以上に推進する。また、農協の集出荷施設の整備や出荷体制の確立により系統出荷率を高めるとともに、全国一の生産量を誇るながいも、にんにく等とのセット販売により産地銘柄を確立して、主産地としての地位を維持向上させることとしている。

(略歴) 1931年、青森県生まれ。農水省東北農試園芸部、蜜糸園芸局園芸課大阪分室、青森県農務課専門技術員、青森県農業試験場畑作部長を経て、現在青森県農林部農業指導課主幹・専門技術員。

2. 吉田家文書

熱帯アメリカ原産とされるサツマイモが、わが国に入ってきたのは江戸時代の初期だった。それはまず九州や四国などの暖地で作りはじめられ、次第に北上した。

ただ関東にまでは、なかなか入ってこなかった。「甘藷先生」として知られる青木昆陽